

Library News

図書館だより No.42
Nara National College of Technology

1997年2月 奈良工業高等専門学校図書館発行



(大和民俗公園・本校名誉教授 石垣 昭先生スケッチ集より)

つきましては、教職員ならびに学生諸君へのお願いですが、ピーアールのよいアイデアがあれば教えてください。また、身近な方や近隣の方々にご利用を呼び掛けて下さい。

いま、図書館委員会は、全クラスの半数が一般利用者より低い利用率となっていることを懸念しています。平均より低位にあるクラスは、一日も早く、一般利用者を追い抜き追い越して下さい。そして、より高い教養と人間性を磨く場として図書館を、おおいに利用してくれることを期待しています。

ひと味違った読書週間「宮沢賢治生誕百年」を終えて

化学工学科 石丸 裕士

最近、活字離れが叫ばれているだけに、読書週間以前に本に縁のない生活を送っている学生諸君にも興味を持ってもらえるテーマにしようとして最初は苦労しました。というのも、恥ずかしながら最近では、私自身も文学書なるものとは疎遠な生活を送っているからです。しかし、私と共に読書週間行事企画担当でした河越先生のご提案のおかげで、何とか今年のテーマ「宮沢賢治生誕百年」とすることに決まりました。その後、意識的に彼の作品に触れるなどした結果、工学系のことを中心に学ぶ高専生にとってふさわしいテーマを選べたと感じています。

例年行われる図書館展示には、ほとんどの図書館委員の先生方にご協力いただき、宮沢賢治の人物を紹介する展示物及び彼の作品の特別書架が完成しました。これに、館長自ら作成いただいた小冊子も加わったことによって、少なからぬ学生諸君から好評を得ることが出来ました。その好評さから、学校説明会（11月17日）の参加者にも見ていただけるように展示期間を延長したほどでした。

今年はこれ以外に、つぎのような2つの企画を新たに取り入れました。

一つは、視覚的な面からも宮沢賢治自身や彼の作品に関心を持ってもらうべく、矢尾先生と廣先生のご提案で「銀河鉄道の夜」「注文の多い料理店」「風の又三郎」のビデオ鑑賞会を行いました。自分なりに描いていたイメージと比べながら鑑賞していた人もいたでしょうが、その作品を読んだことがない人にも楽しく鑑賞してもらえたことでしょう。

もう一つ、細井先生のご提案で「銀河鉄道を読む会」と称する読書会を持つことが出来ました。多人数と言うわけではありませんでしたが、学生・職員併せて20名以上の参加がありました。すでに上映されていたビデオの内容とも関連づけて、単に本を読んだだけでは知り得ない詳細な解説をしていただけました。私の個人的な意見としては、このような機会を是非また持っていただきたいです。

このように、今年の読書週間は例年になくスタイルを取りましたがいかがでしたか。私は、企画責任者のはずだったのですが、その実、いろいろな方々に提案していただいたものを「それにしましょう！」とだけ答え、ひとりの作業員として働いていました。そのおかげで？ 本年はひと味違う読書週間行事になり、なかなか良かったのではないかと考えています。「本」なんて……と知っている人が図書館に寄りついて書物を手にしてくれたとしたら成功だったのですが、学生諸君の意見が聞きたいです。

最後に、この行事を成功させるべく、長時間にわたってご協力頂いた館長を始め図書館委員の先生方並びに図書係の方々に心より感謝致します。

毎年行われている本校の読書感想文コンクールは、今回で21回です。応募作品は388編ありました。その中から、図書館委員会と国語科の先生方が慎重に選考し、次のように、6名の諸君の入選作を決定しました。結果は全校放送でも知らされましたが、あらためてここに彼らの氏名を紹介し、その栄誉をたたえたいと思います。

最優秀	情報工学科1年	赤松 明美	対比『銀河鉄道の夜』を読んで一
優 秀	電気工学科1年	大元 靖理	『変身』
優 秀	電子制御工学科1年	安部 華代	『銀河鉄道の夜』を読んで
優 秀	化学工学科1年	平岡 茂美	『二十四の瞳』を読んで
優 秀	情報工学科2年	出水 将樹	『坂上の雲』を読んで
優 秀	情報工学科2年	藤原 哲也	『銀河鉄道の夜』

入選とはならなかったものの、選考の過程で優れた評価を得て最終選考に残った諸君は、次のとおりです。氏名を記してその努力をたたえたいと思います。

1 M 谷村健太郎	1 M 三村 徳彦	1 E 千野 一郎	1 S 小山 靖博	1 I 岡本 佳子	1 C 生野 恵
1 C 町田 泉	2 M 徳光 宏樹	2 E 橋本 智	2 E 加藤 丹	2 S 山田 昌弘	2 I 大原 誠
2 C 小野 裕香	2 C 坂本 智恵	2 C 清長由美子	2 C 柳田 堅太		

もちろん、本校の読書感想文コンクールは、ここに挙げきれない多くの優れた感想文によって支えられています。次回も、今年以上の力作が寄せられることを期待します。

〈寸 評〉

『銀河鉄道の夜』を対象にしたものが3編入選しました。それらを中心に以下にコメントを加えます。

1 I 赤松さんの文章は、読者への語りかけから始まります。「そんな経験をした事はありませんか、訊ねられて、ああそういえば……と微かな記憶が浮かび上がり、その心像がそっと差し出された「夜空」のイメージと重なりそうになる頃にはもう、すっかり彼女の文章の中に入っています。そこは「対比」の世界。幻想とリアル、ロマンと現実、生と死、愛と憎しみ……。彼女はそれらを、現実あつての幻想、憎しみあつての愛、死あつての生というように、切っても切れないもの、相互に補完しあうものとしてとらえなおしていきます。そして最後に「銀河鉄道は、暗い宇宙に明るく輝く星々をめぐる鉄道だ」という言葉にたどりつきます。彼女の文章を読む喜びは、世界がどんどん厚みを増していき、こころがますます豊かになっていく彼女の経験を、まるで自分自身のものであるかのように思えてしまうところがあります。

1 S 安部さんの文章は「銀河鉄道は、人間の死に向かって続く鉄道である。」という一文から始まります。彼女は『銀河鉄道の夜』に「死」の世界を感じ、『死』という事がどういう事なのか、考えてみる」旅に出ます。それがどういう旅になったのか、は実際に本文を読んで頂くとして、ここでは彼女の旅の行程表に記された「駅名」を紹介しておきましょう。①「自殺願望」②「運命」③「ほんとうのさいわい」④「生きる使命」。彼女の旅の収穫はおそらく④で、そこからもう一度③を訪ね直しているところがこの旅をととも実りのあるものにしました。

2 I 藤原くんの文章は「空を翔ける。宇宙を翔ける。」という詩的なフレーズで始まります。それはしかし、空に「夢」を見ることが少なくなった現代を嘆いて見せるための小道具ではありません。『銀河鉄道の夜』の中に自ら夢を探しに行こうとする、いわば探検家の所信を表明する宣言のようなものとして置かれているのです。そしてこの大胆かつ繊細な夢の探検家は、ジョヴァンニの前に銀河鉄道が現れたのはなぜ？ 彼が生きて戻れたのはなぜ？ 博士とは誰？ といった謎をていねいに読み解いていき

ます。その謎解きにつき合っているうちに、「夢を見ること」と「生かされてここにあること」との微妙な関係が浮き彫りにされる、そんなふうには作られていると思いました。

紙数が限られてきました。『変身』で、大元くんは「変身／変心」のドラマを乾いた文体でクールに分析し、『二十四の瞳』で、平岡さんは歴史を自分の経験に引き寄せつつ「魂の母」をヒューマニスティックに謳い上げ、『坂の上の雲』で、出水くんは天下国家を論じることのできた明治青年の幸福に自らも寄り添いながら「国家／国民」という難しい問題の入口に立とうとしています。それぞれ、じっくり味わってみてください。

(国語科・武田)

入 選 作 品 紹 介

対 比—『銀河鉄道の夜』を読んで—

情報工学科1年 赤松明美

小さい頃、ふと見上げた夜空に輝く月を見て、ウサギが本当にいるのではないかと真剣に考え、ずっと月を見ていた事があります。あなたは、そんな経験をした事はありませんか。夜空に心ひかれた事ありませんか。私たちの見ている星の光は何億年も前の光です。それだけでも何か神秘的で、人間にはとうていばかり知れないものを感じます。人はそのような所から夜空に心をひかれるのかもしれない。そして宮沢賢治も夜空を見上げ心ひかれてこの『銀河鉄道の夜』をかいたのかもしれない。

この本を読んで私は、全体にふわふわと夢心地のような幻想的な雰囲気を感じました。ところが、所々に、本当にあるかのようなリアルさがあります。例えば、天の川の水の質感など、まるで作者が実在に触れたことがあるのでは。と思うほど、微細にかかれています。幻想的な雰囲気とリアルさが微妙に調和され、ぜんぜん違う世界だと思っていたのに、身近な事のように思えてきます。

この本の中にはこのようにまったく正反対のものが他にもできます。私はその作者の表現力にとっても感銘を覚えました。

銀河鉄道の汽車の中では主人公以外の人は皆死んでいます。ところが、死が充満した世界から、生を見るので、まったく暗く感じません。言わば、死があるからこそ生が輝いて見えるのかもしれない。生と死、まったく別のもののように思えま

すが、二つは共になくては存在することができないのだと感じさせられました。

そして、このような対比は人間の内にもあると思います。誰かをひがんだり。うらやましがったり。いじめたり。何かを欲しがったり。なのに誰かをいたわったり。心配したり。かばったり。それは人間誰にでもあると思います。でも、そんないやな部分があるからこそ、いい部分がよりいっそうよく見えるのではないのでしょうか。

本の中に『幸せって何だろう。』という言葉が出てきます。私はいやな思いをしないことが幸せなのだと思っていました。でも本当にそうなのでしょう。自分さえいやな思いをしなければ幸せなのではないでしょうか。今は、私は違うと思います。幸せって、そんないやな事を乗り越えることなのではないかとこの本を読んで思います。この本の主人公、ジョバンニは、いじめられても、誰になんと言われても父が帰ってくると信じ続けました。友達のカムパネルラは川におぼれた友達を助けて死んでしまいます。銀河鉄道内で会った、家庭教師や少女は、死ぬというのに他の人を思いやりました。でも、だからこそ、彼らは心の底からよかった。と思えたのではないのでしょうか。苦しい思いをしたからこそ、その喜びは大きいのだと思います。私はこれからは、いやな思いをしても、そこから、喜びにかえられるような、彼らのような人間になりたいです。皆が皆、悪い所をばねにして強い人間になれば。どんなにすばらしいことでしょう。そうなれたら、どんなに幸せなことでしょう。そしてそんな人たちがだけ、銀河鉄道に乗れるの

かもしれません。

銀河鉄道は、暗い宇宙に明るく輝く星々をめぐる鉄道だから……。

『変身』

電気工学科1年 大元靖理

この作品ではいきなり主人公のグレゴールが巨大な毒虫に変身してしまった場面から始まります。しかしグレゴールは自分の身に起こった異変を意外なほど冷静に受け止め、電車の時間や仕事などの現実的な問題を憂慮しています。彼の家族もグレゴールの身に何らかの異変が起きたことに気付くのですがまさかグレゴールが毒虫に変身しているとは予想もつかなかったでしょう。なぜならドアが開かれて家族たちがグレゴールの姿を見た時、声も出せないほどだったからです。

グレゴールはなぜ変身してしまったのでしょうか。それについては作品中のどこにも書かれていません。この作品は変身の理由を必要としていないのでしょうか。この作品の面白い所は変身による主人公の気持ちとその周囲の人々の心の変化だと思います。

グレゴール自身は自分が毒虫に変身してしまったというのに一番冷静なように思います。それどころか部屋に入ってくる者が自分の姿を見なくてもすむように色々と配慮しています。

それでは周囲の人々はどうなのでしょう。ドアが開かれてグレゴールが姿を見せるまでは周囲の人々はグレゴールを心配しています。しかしグレゴールが姿を見せると突然グレゴールから距離をおいて接するようになります。グレゴールは望んで変身したのではないのだと思うのですが。

変身をすれば変身以前とは全く別の物になってしまうのでしょうか。確かにグレゴールの姿は人間とはかけ離れた物になっていました。しかしグレゴールの心は別に変化していませんでした。対照的に周囲の人々は別に姿が変わったわけではないのですが心の変化が大きかったように思います。

グレゴールは望んで変身したわけではありません

が現実はどうでしょうか。もちろん望もうが望むまいが変身して全てを変える事はおそらく不可能でしょう。しかし変身したつもりになって別の人生を疑似体験することは可能です。そして今、それが若者の間で人気があるそうです。例えば映画やアニメの声優などは大変人気があるそうです。多分、それなりに厳しい世界とはいえ、比較的手軽に『変身』できるというのが人気の一因であると思います。

グレゴールが変身した後彼の身の回りの世話をするのは主にグレゴールの妹です。しかし彼女も全くグレゴールに対して抵抗がないわけではありません。グレゴールの父に至ってはグレゴールに対して少なからずとも殺意を抱いている様子がかがえます。その証拠に父親だけがグレゴールに対して攻撃を加えています。

グレゴールは最終的には死んでいきます。しかしだからと言って周囲の人々にしてみれば虫が一匹死んでやっかい払いができたといった程度かも知れませんし、やはり家族の一員の死ということで悲しんだかも知れません。しかしグレゴールの家族がグレゴールを家族として受け入れていたかどうかは疑問です。

この作品のタイトルの『変身』の意味は何なのでしょう。それは、もちろん、グレゴールが人間から大きな毒虫に変身してしまったという事なのですが、それだけではなく周囲の人々の心の変化、つまり『変心』でもあると思うのです。

望む変身と望まない変身。グレゴールは本当は変身を望んでいたのではないのでしょうか。世の中に不満を覚えて自分自身や普段の生活全てから変身することで逃げ出したい気持ちはあったと思います。現実はこの作品のようにある日突然変身することはないにしろ、心の中では変身を望む人は結構たくさんいるように思います。

『銀河鉄道の夜』を読んで

電子制御工学科1年 安部華代

銀河鉄道は、人間の死に向かって続く鉄道であ

る。

私は今まで「死ぬ」という事について深く考えたことはあまり無かったが、この本を読んで「死ぬ」という事がどういう事なのか、考えてみることにした。

ジョバンニが最初持っていた自殺願望によって、この物語は地上から果てしなく大きな銀河へとステージを変えていった。誰でも一度は持った事のある「死にたい」という気持ちを、否定する事はできないだろう。ジョバンニはあの丘の上にある天気輪の柱の下で、カムパネルラに裏切られた孤独感やなにかを、いっぱい抱え込んでいた。私ももし誰もいなくて孤独だったなら、何もかも放り出してどうなってもいいと思うかも知れない。

けれど、ジョバンニは銀河鉄道に乗った時から、地上での出来事を忘れてしまった。そしてカムパネルラとの再会をする。二人の悲しい銀河鉄道の旅が始まったのだ。

ジョバンニは最初、この列車に乗ってくる人のすべてと永遠の別れをする事を知ってはいなかった。だが、列車の外に映る様々のどこかさびしく、そして美しい風景の中から、心の底で悲しさを感じていたのではないだろうか。

もしも、私が死ぬ時に銀河鉄道の旅をすれば、どんな気持ちでいるのだろうかと思う。今の私だったら、きっといつまでも死にたくないと、そればかりを思っているのではないだろうか。ジョバンニやカムパネルラのように、周りの人々と接触する事なんてできないし、あの姉妹のように、お互いを思いやりなんかできない。彼らはそういう自分の運命を受け入れている。彼らは、もっと生きたいとは思わなかったのだろうか。それとも、天上に行く事の方が生きていくよりも良いと思ったのだろうか。もう、生きることをあきらめてしまったのだろうか……。

そもそも生きるというのはどういう事なのだろうか。生命あるものは全ていつかは死ぬ。当たり前前の事だが、では死ぬということもどういう事になるのか。呼吸が止まって、心臓が動かなくなると、体温がなくなるという、それだけだろうか。

他にもあると思う。

ジョバンニとカムパネルラが別れる前に、「ほんとうのさいわい」について話していた。これは、人それぞれに意見は分かれると思うが、私は、ただ自分が幸せなだけでは「ほんとうのさいわい」とは言えないと思う。自分も幸せで、自分が幸せになってほしい人々がみな幸せであるよう、追い求める事が大切なんだと思う。彼らはそれが何であるか、理解する事はできたのだろうか。

結局ジョバンニはカムパネルラを失い、また孤独になってしまったが、彼は以前の彼とは確実に変わったのだと思う。それまでのジョバンニになかった「生きる使命」のようなものができたように感じる。それを作ったのはカムパネルラと別れた瞬間のジョバンニの涙で、彼はきっと生きる事、死ぬ事について一生けん命考えながらちゃんとやっていったのではないだろうか。私は、彼が彼自身の「ほんとうのさいわい」をいつか見つけられるように祈りたいと思う。

『二十四の瞳』を読んで

化学工学科1年 平岡茂美

この物語を読んで、大石先生と分教場の十二人の子供たちの事がすごく身近に感じられた。私の家もすごく田舎で、今はもうないけれども分校もあった。それに、戦死した祖父と仁太や竹一の影が重なり合うように思えてならなかった。

大石先生のかつての教え子である竹一や吉次などの男五人が戦争に行くとき、「名誉の戦死など、しなさんな。生きてもどってくるのよ。」

と先生は声をひそめた。私は思わずこの一行を何度も何度も読み返してしまった。ほとんど無意識のうちに。それは、この言葉をかけられた五人も同じだったのではないだろうか？自分の頭の中に何度も何度も大石先生の声が繰り返されたにちがいない。だからこそ、昔にもどったような素直さになって涙ぐみ、うつむき、うなずいたのだ。

母親としての大石先生も又、戦争戦争という風

潮に流されない女性だったと思う。わが子の、肩をふって走ってゆくそのうしろ姿に無心に明日へのびようとするけんめいさを感じる大石先生は、「その可憐なうしろ姿の行く手にまちうけているものが、やはり戦争でしかないとすれば、人はなんのために子をうみ、愛し、育てるのだろう。砲弾にうたれ、裂けてくれて散る命というものを、惜しみ悲しみ止どめることが、どうして、してはならないことであろう。治安を維持するとは、人の命を惜しみまもることではなく、人間の精神の自由をさえ、しばるというのか……」とはげしくうったえる。そして

「こんな、かわいい やつどもを、どうして、ころして よいものか わあっ、わあっ。」
と三人の子供をかかえこむが、その子供たちには幼すぎてそこにどんな気持ちかひそんでいるか知るなどどうてい無理であった。そんな幼い子供の頃から「兵隊さん兵隊さん」とわけも分からないままはしゃぐのが普通になっているのが悲しい。

日本が負けて戦争が終わってからの大石先生の息子、大吉の言葉も深い印象をあたえる。大石先生の

「……お母さんが一生けんめいに育ててきたのに、大吉ァそない戦死したいの。……」
という言葉に対して

「そしたらお母さん、靖国の母になれんじゃないか。」

と言った大吉は、これこそ君に忠であり親に孝だと信じていた。全く恐ろしい時世だ。父親が戦死した時でさえ、父はよろこび勇んで出ていったのだ、と母親に言わせたがった大吉。そうじゃないと肩身のせまい思いをする時代、子が親に孝と親を裏切る時代。

母と夫と娘、そして教え子たちを大石先生からうばっていった戦争。あの日、「戦死などしなさんな。」と声をかけた五人のうち三人は戦死、一人は失明してしまった。そこに残ったのは一枚の写真であった。一年生だった十二人は足を怪我して休んでいる大石先生の顔が見たくて、片道八キロの道を誰にも内緒で出かけていった。「二里の

遠さを足の裏から感じ出してだんだんだまりこんでいった。まるで遠い国へ来たような心細さがみんなの胸の中に重石のようにしずんでゆく。」そんな時バスからおりる大石先生に会ったのだ。その時の写真はみんなの思い出の品だ。物語の最後に失明した磯吉がこの写真は見えるんじゃ。と級友のひとりひとりを人さし指でおさえてみせるのだったが、少しずつそれはずれたところをさしていた。それと「そう、そう、そうだわ。そうだ。」と答える大石先生。彼女こそ二十四の瞳にやどる昭和の少年少女たちの魂の母であったに違いない。

『坂の上の雲』を読んで

情報工学科2年 出水将樹

司馬遼太郎さんが逝去されてからもう半年ほど過ぎたのではないかと思う。彼の本は「龍馬が行く」、「新撰組血風録」、「国盗り物語」などを読んだが、表題のように、「坂の上の雲」の感想を書こうと思う。何故なら、この本は僕が中二の夏に司馬さんが書いた本としては最初に読み、感銘が深かったからである。

この物語は日本人とは何か？ということをおぼろしく然とした主題として、三人の人物を中心として話がすすんでいく。日本騎兵の創設者である秋山好古、その弟で海軍参謀・秋山真之、真之の友人であり、近代短歌・俳句の祖である正岡子規。彼ら三人はともに伊予松山出身で、数々の問題を持ち前の楽天さで乗り越えていく。しかし、楽天的なのは彼らだけではなく、この時代の日本人—明治人—特有のものだと思う。庶民は重税にあえぎ、国権はあくまで重く、民権はあくまで軽く、足尾の鉍毒事件があり女工哀史があり小作争議がありで、現代の人々から見るとこれほど暗い時代はないかもしれないが、彼らは口々に明治は良い時代だと言い切る。また、政府は政府で米と絹のほかには主要産物のないこの農業国家にヨーロッパ先進国並の海軍を持とうとし、そして陸軍を持とうとした。彼らは日本という産業もろくになく、ないに等しい軍備しか持たない国を強くするというた

だひとつの目的に向かって進み、その目的をうたがうことすらしなかった。近代国家をつくりあげるために食うものも食わずに過ぎた明治人。はた目からみると悲惨だが彼らは「国民」という新鮮なものに昂揚していたのだと思う。現代人が忘れさせた「国家」というものに対しての夢や希望を彼らはしっかりと持っていたのではないだろうか？ 前述の三人、秋山真之は日露戦争のおこるにあたって勝利は不可能に近いといわれたバルチック艦隊をほろぼすにいたる作戦をたて、それを実施した男であり、その兄好古は、ただ生活費と授業料が一文もいらぬというだけの理由で軍人の学校に入り、フランスから騎兵戦術を導入し、日本騎兵をつくりあげ、とうてい勝ち目はないといわれたコサック騎兵集団と戦い、かろうじて潰滅をまぬがれ勝利の線上での戦いをもちこたえた。また、正岡子規は結核による咯血を堪えて、古今和歌集を否定し近代短歌を作りあげた。彼らも、決して天才などという言葉にはあてはまらない、この時代のごく平均的な一員として、この時代人らしくふるまっていたような感じがする。たしかに彼らの試練の多さは想像を絶するほど多い。しかし、彼らが深刻な問題でも結論を出し得たのは明治時代特有の楽天主義オプティミズムの流れに逆らわなかったからではないだろうか？

話は変わるが、日露戦争における日本政府がとった戦略計画は、わずかでも踏み外すと後がない綱渡りのようなものだった。ロシアという大国の初動動作の鈍重さを利用して、宣戦布告とともに二つ三つ攻勢をかけて勝ったように見せかけ、大国が本格的な反応を示す前にアメリカの同情を利用して割って入ってもらって講和にもちこむというものだった。緒戦ですばやく第一撃を与えれば国際的印象が日本の勝利のように見え、戦費調達のための外債もうまくいく。あくまでも決め手は外交であり、その点ではロシアは負けるべくして負けたのではないだろうか。日本の同盟国・イギリスは、その巨大な通信網を使ってロシアが負けているように見せかけた。またロシア国民の厭戦気分あおや革命気分を煽り、ロシア政府を混乱させた。

戦後の日本政府はこの冷厳な事実を国民に教えず、国民は日本軍が神秘的な強さを持つと思ひ込んだ。やがて起こる太平洋戦争で敗北したのは日本が狂いだしてからわずか四十年のちのことである。敗戦が国民に理性を与え、勝利が国民に狂気を与えるとすれば、戦争の勝敗というのはどちらが良いのか分からない。

『銀河鉄道の夜』

情報工学科2年 藤原哲也

空を翔ける。宇宙を翔ける。

人々は空に、宇宙に夢を見ます。手の届かないものを掴もうとする思い、それははるか昔から変わっていません。主人公のジョバンニも宇宙に夢を見ていました。彼の求めたものは大きくありません。広大な宇宙に比べれば、小さな、小さなものでした。けれど、彼の求めたものはかけがえのないものです。

今では空に夢を見る人が少なくなりました。身近なものになってしまったからです。もう、空に夢を見ることができるようほど空は澄んでいないのかもしれません。青く輝いていた空が血で赤く染まった時から。

まだ宇宙は夢であふれています。星の輝きが、輝きが生み出した星座達が、多くの夢を与え続けてくれるからです。

銀河鉄道はそんな夢にあふれかえった宇宙を越えてジョバンニの前へと現れました。

死者の魂を運ぶ銀河鉄道がなぜジョバンニの前に現れたのでしょうか。彼が死んでしまったから？ 違うはずです。

銀河鉄道に乗っている時、切符を見せる場面がありました。そこでジョバンニの持っていた切符は『どこへでも行ける切符』とされています。他の人はみんな目的地の決まった『片道』切符であったのに、彼だけは、どこへでも、つまり再び地上へ戻ることもできる『往復』切符を持っていたのです。戻ることができる、それは、彼がまだ地上にいる資格を持っているということですから、

彼は死んではいないことが分かります。

では、なぜ？僕はこう考えます。ジョバンニは心のどこかで自分の現実での存在を否定していたのではないかと。学校では孤独なジョバンニ。だけど母にはその事実を隠し続けている。その上、父に対するうわさや、仕事での疲労。彼はつらかったのではないのでしょうか。そして魂が、心が死んでしまった。だから彼の前に銀河鉄道は現れた。彼の魂を連れ去るために。

彼の肉体は生きていますが、魂が死んでしまったジョバンニでは、彼は銀河鉄道の旅を終えた時に地上に立っていたのでしょうか。彼の魂の旅の最後に、彼は自分の生きる目的を見付けます。生きることにつかされた彼が、生きる目的を見付けた。だから彼は旅を終えた後地上に立っていた。初めはそう思っていました。ですが、カムパネルラが突然消えてしまったことを考えると、他にも考え方があってはいないか。そう思えたのです。例えば、ジョバンニが生きる目的を見付けたから戻れた。それだけではなく、カムパネルラがジョバンニに対して何らかの力を貸したからではないのか。そんな風に思えたのです。

カムパネルラは自分が死んだことを知っていました。それは、『母さん、許してくれるかな。』という言葉からも明らかです。では、彼はジョバンニが活着していることを知っていたのでしょうか。ジョバンニとは違い、彼の切符は『片道』で、どこまでも行けるものではなかったはずですが。そして、おそらく彼が下車しなければならなかった駅は天界。そう、彼は乗り越しをしたのです。忘れてしまっていた、カムパネルラに限ってそんなことはないでしょう。つまり、彼はわざと乗り越したのです。なぜ？彼は優しく、そして偉かったから、気付いていたのではないのでしょうか、ジョバンニが活着していることに。活着しているはずのジョバンニが銀河鉄道に乗っている。だからカムパネルラは彼を生かそうとしたのではないのでしょうか。

カムパネルラは自分がどうなるか分からない。そんな状況に自分を置いてジョバンニを生かそうとしました。自分が一緒にいることでジョバンニ

は励まされるということが無意識に知っていたから、彼はそうしたのでしょう。そして、その目的が果たされたのを知り、そんな時に天上に母の姿を見付けた彼は、銀河鉄道から姿を消しました。彼が無事天上へ着いたのかどうか。それは博士の言葉から推測出来ます。『あらゆる人の一番の幸福を探し、みんなと一緒に早くそこに行くがいい。』善行を積んで行く場所にカムパネルラがいる。それは、カムパネルラが天上へ行けたことをしめています。

ジョバンニは心の旅を終え地上へと戻りました。彼が銀河鉄道で最後に出会った人物『博士』が明確にしてくれた自分の進むべき道を歩んでいこう。そう心に決めて。

銀河鉄道の旅の最後、ジョバンニを地上へ帰す最後の手伝いをした『博士』。この作品の中でもう一人同じ呼び方をされていた人がいました。カムパネルラのお父さんです。彼が『博士』である。そう断言は出来ませんが、同一人物なのだろうか。そう思える文章がいくつかありました。『どうも今晚はありがとう。』、この言葉は、今日はここに来てくれてありがとう。という意味と、銀河鉄道ではありがとう。という意味に思えました。もう一つ。『博士はまた、川下の銀河のいっぱいにつつた方へ、じっと目を送りました。』、この言葉は、カムパネルラの消えた川下へと目を送った。という意味と、川下に映った銀河のどこかにいるカムパネルラを思って目を送った。という意味に思えました。『博士』と博士が同一人物でなければ、わざわざ最後にカムパネルラのお父さんを博士と言い換える必要がない、そう思えるのです。

銀河鉄道は夢幻列車。ジョバンニの心理面が大きく反映されていてもおかしくはありません。だから、この銀河鉄道に乗り、一緒に旅をした人は、どこかでジョバンニと出会ったことのある人かもしれせん。

少年が翔けた宇宙の夢が、彼と彼の周りの人を幸いとす糧となることを銀河鉄道の翔ける夢幻の宇宙に願って……。

退官教官からのメッセージ

私の大学時代

田 端 敬 昌

霧くぐり来ては 図書館の列に入る

これは大学時代に私が作った俳句です。当時、阪大理学部は中之島にあり、少し離れた所に府立図書館があり、この図書館を私はよく利用しました。冬の朝、橋の上から霧のたちこめた路を行くと、図書館に入るための人の列が見えてきたのです。それは昭和20年代後半のことで、その頃、枚方の御殿山にあった阪大工学部と敷地を接していたK製作所では、朝鮮戦争で使うための鉄砲の玉を作っているとかで、学生が騒いでいたのを覚えています。大学をでても今以上の就職難でして、日本の行く末も、学生達の将来も、どうなるのか見透しがきかず深い霧に閉ざされていました。

当時、戦後の貧しさはまだ続いて居り、テレビもまだ無く、レジャーといえば、たまに映画を観に行くくらいのことでした。私は高校時代には美術部や俳句部に所属して、友達と楽しく過ごしていたのですが、大学時代にはそれも無く、多くの時間を読書に過ごしていたようです。それは、レジャーというよりも、何かを求めるような切実な気持ちで、ゲーテ、ヘッセ、カロッサ、トルストイ、ロマンローランといった文学作品や、矢内原忠雄の「キリスト教入門」、桑原武夫の「第二芸術論」それに題名は忘れましたが、同じ桑原武夫がデュウイの概念器具等の現代哲学について解説的に書いた本等も、中之島の図書館で読みました。

今は亡き伊藤整が「私にとって青春は青春不在感という形で存在した」といったようなことを書いているのを読んだことがあります。同じように貧しかった大学時代の私の青春は、すぐれた外国文学等の本の中の世界に没入することにおいて、精神的な豊かさを得ていたといえると思います。

もっと基礎学問を！

鈴 木 忠 二

昨年3月末で定年退官し、はや一年が過ぎようとしています。皆さん“お元気ですか”。私はその後、奈良高専の非常勤講師として毎週月曜日に電気工学科4年生の諸君と接する機会に恵まれ、先生を続けています。退官後の本業は国際基盤材料研究所（所在地：米国ケンタッキー州と日本の川崎市）で若い研究者（多国籍）の研究開発の指導をしながら、自らも「先端技術の研究計画立案や調査」を専門に行っています。その関係で海外で開催される国際会議に出席する機会にも恵まれ、世界の動きを肌で感じながら21世紀の科学技術展望を洞察する毎日です。しかし、将来の創造的考察は若い人以上に柔軟な思考プロセスと創造力を醸し出す集中力とその努力が必要であることを痛切に感じております。そのため自分の年齢のことはあの世に預け、若い研究者達の中に入り仕事に熱中する日々が続いています。海外出張の折には出来るだけその地の文化に触れ、理解しようと現地の本を買い、読み、人の話を良く聞くよう努力をしています。ついでに学生のことを思い出した時には、その土地の案内小冊子を求め学校の図書館に置くようにしています。最後に、若い学生に一言“すでに直面している国際化時代に対応できる基礎学問を自ら学ぶよう習慣付けること。そのために図書館を大いに利用しながら身に付けて下さい。やる気があれば何でも出来る、出来ないのはやる気が無いから”でしょう。お互いに自分の将来のために頑張りましょう。

(e-mail:c-suzuki@mba.infosphere.or.jp)

図書館アンケートの結果について

学生図書委員会

図書委員会は、学生の図書館利用の現状把握と今後の図書館充実を願ってアンケートを実施しました。1015人中518名から回答をいただきました（回収率=51%）。皆様のご協力を感謝いたします。このたびアンケート結果がまとまりましたので報告いたします。「調査実施期日=平成8年7月」

〔結果報告〕

- ① 図書館の利用率は、90%近い学生が月に1回以上、その内20%の者が常連として利用している。このように多くの学生が利用していることは、非常にうれしいことである。その反面、全く利用していない学生が13%も確認された。恐らくこれは、レポートなどの作成や調査の少ない低学年に多いと思われる。
- ② 学生の61%以上は、図書館本来の目的にあった利用をしている。どんな目的であれ利用が増えることにこしたことはない。
- ③ (3)の設問は、学生の選んだ読書100選を作成するために設定した。20数名が推薦する本から、1名推薦の本まで220のタイトル上がった。これに関しては、わが校の特徴が出ているが、特にブックハンティングで図書委員が購入した（クリスタニア、ロードス、妖魔夜行etc）の人气が目立っている。図書委員としては、うれしい限りである。これらの推薦図書から「学生推薦図書50」を選びます。
- ④ 設問(4)は、図書館で購入している雑誌のチェックが目的であったが、回答は市販されている総ての雑誌が対象となったようだ。その内ベスト8までは、蔵書しておりよく利用されている。このように上位は、おおむね蔵書雑誌だったのでよかったと思う。アンケートの傾向としては、専門雑誌の人気の低さが目立つ。購入されていない雑誌で注目されるのは、「関西ウォーカー」と「login」であった。
- ⑤ 設問(5)では、「non-no」について、設問(4)でも上位にあった「関西ウォーカー」と「login」の希望が多かった。上位3位は、確かによく読まれている雑誌である。その他の雑誌傾向としては、ゲーム、アニメ、音楽、ファッション等の雑誌が多い。わが校は他校と比べても少しマニアックな学生が多いと思われるので4位以下の雑誌の中でも少しマニアックな雑誌（Newtype、ラジオライフ、ホビージャパンetc）も硬いこと言わずに入れてみてはどうかと思う。
- ⑥ 設問(6)では、完全に票がばらけた。全165タイトル中150タイトルが1票。1位の「スレイヤーズ」でも4票。学生の趣味の多様性がうかがえる。「スレイヤーズ」と「ゴーマニズム宣言」の一部は図書館に入りました。
- ⑦ 設問(7)では、109タイトルの希望があった。ビデオ・LD部門では「エバン」が段とつ1位、CD部門でも3位にサントラ盤が入るといった人気。他にも「マクロス」「ゴジラ」「ガメラ」などの濃い作品が、ビデオ、LD部門に多かった。また、2位の「セブン」「スピード」「ダイハード3」などの洋画も強かった。
CD部門では、歌手指定だけでタイトルを指定していない者が多かったが、トータルでは、「Mr, Children」の人气が光った。また、洋楽ロックも多かった。この内、「スピード」や「ダイハード3」のように、既に購入しているソフトもあるので、一度図書館に足を運んでほしい。
- ⑧ 図書館でもっと充実してほしい資料では、「趣味の本」（音楽・映画・スポーツ等）52.7%、次い

で「専門のやさしい参考書」44.4%、「ビデオ・LD・CD」37.3%、「娯楽・教養書」35.1%となっている。専門書等は既にある程度充実しているが、入門書的なわかりやすい参考書を希望する学生が多い。また、図書館の娯楽施設としての側面の充実を望む声も聞かれる。

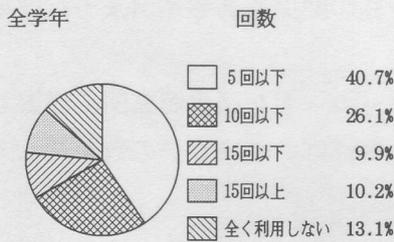
⑨ 図書館への要望が多かったのは、CD-ROMコーナーの設置28.8%、次いで自習室の設置25.5%、学習用パソコンの設置25.1%、閲覧環境の整備24.3%となっている。この要望を大幅にかなえようとするれば、図書館の拡張が必要となる。とりあえず閲覧環境の整備やCD-ROMコーナーの設置等から始めてはどうかと思う。

⑩ 図書館に対する希望は、「検索を早く」が一番多く、次いで「照明が暗い」、「新しい参考書を」、「図書館の拡張」、「机椅子の改善」となっている。やはり利用者の身でないといけない意見が多かった。出来ることから改善すべきである。また、数人ではあるが、図書館にガンバレとの声援をおくってくれたことは、図書館に携わる者として、うれしく感じるとともに、期待に添えるよう頑張りたい。

図書委員会は、以上の結果を図書館長に報告いたしました。館長は、学生諸君の意見を尊重し、今後の図書館活動に反映させるよう努力し、期待に応えたいと話されました。そのためには、われわれ学生は、図書館のより一層の利用と図書館活動への積極的な参加を希望されています。

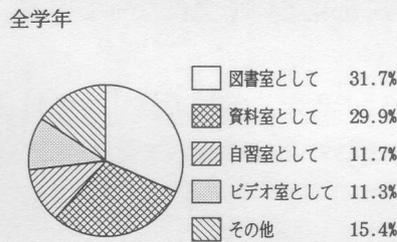
(1)あなたは、

月に何回ぐらい図書館を利用しますか

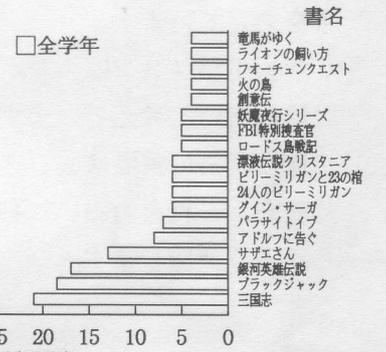


(2)あなたは、

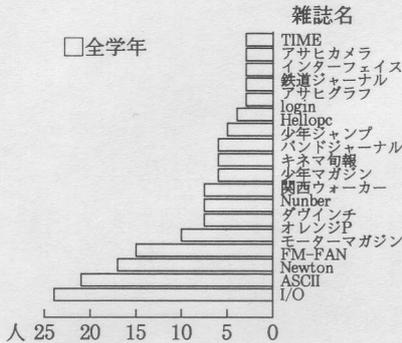
図書館を主にどのように利用していますか



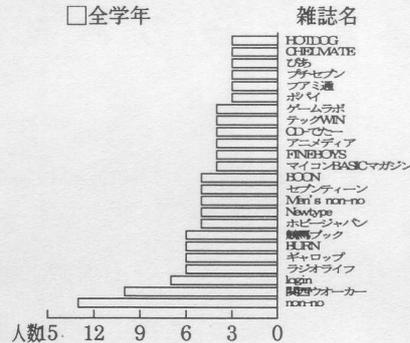
(3)面白いと思った本や、他人にすすめた本は



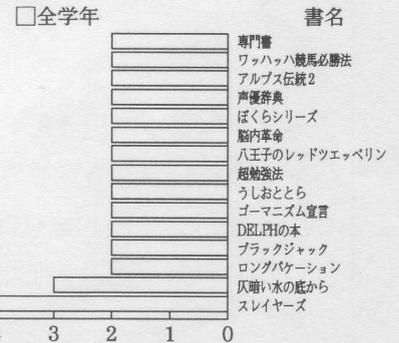
(4)あなたがよく利用する雑誌名を書いてください



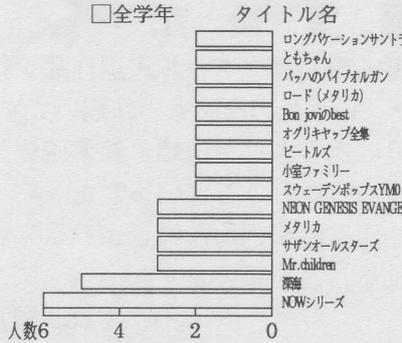
(5)定期購入希望雑誌名



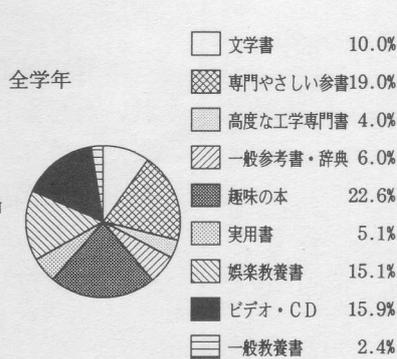
(6)購入希望図書



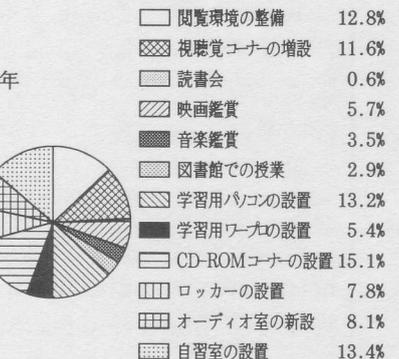
(7)購入希望CD



(8)充実してほしい図書・資料



(9)図書館への要望



〔館長のコメント〕

- ① 図書館を利用していない学生（13％）を、如何にして図書館に引き付けるか、どうすれば利用してくれるか、早急に検討します。
- ② 学生の推薦図書および希望図書から、今回、学生推薦図書50選をリストアップしたことは、嬉しい限りです。これからも、図書館活動により一層の関心をもってほしいと願っています。
- ③ 雑誌については、全く読まれていない雑誌もある。希望雑誌も含めて現在学生にマッチするような雑誌を来年度は選定したいと考えています。
- ④ 希望図書購入には、年2回のブックハンティングと図書館備え付けの学生希望図書購入リストを活用してください。出来るだけ購入努力をします。
- ⑤ ビデオ・LD・CDについては、希望に応えるべく上位タイトルを積極的に購入したい。
- ⑥ 本年度図書館では、専門書が古くなったとの声が聞かれたので、専門書の刷新をはかりました。学生諸君の勉学に、大いに利用してくれることを期待しています。
- ⑦ 図書館の環境整備は、照明および机・椅子の改善を重点的に考えています。
- ⑧ CD-ROMについては、ソフトの購入を急ぎ出来るだけ早く、学生諸君の学習に便宜を図れるよう努力しています。
- ⑨ 学習用パソコンは、レポート作成を見ていて気になっている。予算の関係もあるが出来るだけ早く設置したいと考えています。
- ⑩ 荷物置場の狭隘は、ご迷惑をかけてきた。学校では「カギ付きロッカー」を図書館玄関に設置してくれた。これをおおいに利用してほしい。様子を見て、利用が多くなれば、ロッカーの数を増してもらうよう要望します。

図書館からのお知らせ

☆学年末休業中の図書館利用について

・開館日時 3月19日(水)～4月2日(水)
8:30～17:00まで
土・夜間開館はありません

・閉館日 4月3日(木)～4月7日(月)
館内整理、新年度準備のため閉館
・貸出冊数 6冊 3月13日(木)より貸出
・返却日 4月8日(火)までに返却

なお、卒業予定者は卒業式当日までに必ず返却して下さい。また、図書を紛失した場合は、図書館カウンターで御相談ください。

☆図書館カレンダーを作成して、カウンターに置いてあります。御利用ください。

☆本校図書館のホームページアドレスは、下記のとおりです。一度試してみてください。

<http://www.center.nara-k.ac.jp/homedocs/japanese/library/index.html>

編集後記

本号では読書感想文コンクール入選作品を掲載いたしました。いずれの作品も力作揃いです。また、昨年3月に退官された田端、鈴木両先生からご投稿頂きありがとうございます。

今後とも広く図書館が利用され、よりよい読書活動が行われることを願います。

(委員一同)